

手探りの中で見えた、「私の輪郭」

私が県庁のインターンシップ実習を希望した理由は、「とにかく県政について、見たい、聞きたい、知りたい」といったものでした。就職希望先は既に県庁を第1志望に決めているのですが、「体験してみなければ分からない」というような考えがありましたので「どの部署でもよい」という所属先希望を出しました。

決まった所属実習先は「健康福祉部薬務課」です。体験以前に、この部署がどのような業務を行っているのか知らなければ実習の効果を最大にできないと思ったので、まずは県庁HPにくまなく目を通しました。HPを見る中で、「麻薬」「危険ドラッグ」という時事の渦中にあるキーワード、「温泉」というゼミ活動の1つであるハンセン病に関連するキーワードも目につきました。実習前から、実習での活動に期待を膨らませていました。

全体実習では今後も同じ土俵で戦っていくライバルを見つけるために、情報交換をして自分が普段なしているか、どういう活動を行っているかをつぶさに話しました。このことは、薬務課の職員の方のお話の際に、自分のことをまずは知ってもらおうと思ひ話をするように心がけました。緊張しながら自分の活動をわかりやすく話す機会として、面接を想定したものになるかもしれないとも思いました。

全体実習では実習生6人でグループを組み、若手職員の方と1対6で話す機会をいただきました。その中で特に驚いたのは、「みんなも自分のことを話すことができるし、話せるエピソードを持っている」ことと、「みんなが思ったことを率直に、しかも自分の経験に基づいて話せる」ことでした。座学よりも活動が第1であるという考え方が当たり前なのは分かっていましたが、みんなが各大学でさまざまな活動を行っているのを聞いているうちに、「私も負けられないな」とライバル心を持ちました。

薬務課での所属実習では、一目で技術士(薬剤師)さんも職員さんとして働かれている部署であるな、と分かりました。私の目指す一般行政の職員の方は県政の一部ではあるけれども、非常に重要な業務を行っていると感じました。お話を聞いているうちに技術士の方と職員の方の非常に多様な考え方によって、福利厚生のためにどのようなものを提供できるかという信念が、集約されて、そしてそれが県政という大木の大切な一本の幹や枝となっていることが分かりました。

実習全体を通して、「自分がどの位置に立たされているのか、そこでなにをすべきであるか」を自覚することができました。そして、県政について理解も深まり、自分の将来像、「輪郭」もはっきりしてきました。日常では味わえない体験でした。

全体実習で、職務中にもかかわらず様々なお話によって指針を示してくださった先輩方、グループで一緒になり、同じ志を分かち合った実習生、そして私が専門知識を持っていないにもかかわらず、丁寧なご解説をいただいた薬務課の皆様。また、このようなプログラムを組んでくださった人事課の皆さまに、深く御礼申し上げます。今後ともご指導よろしく申し上げます。